

ちょうど四半世紀前、私はコロンビアにいて、野生ザルの生態研究にふさわしい森を探し歩いていた。熱帯の田舎町への交通は不定期に飛ぶくたびれたDC-3機のみだ。飛行機は重々しく緑の樹海をかすめる。樹海はどこまでも続く。その中に、調査に適した一点をどうやってみつけたらいいのだろう。

窓から眼下を眺めつつ途方に暮れた当時の気持は、まだあまりに鮮明である。それなのに私は今、まさにその、果てなく広い熱帯雨林の保護にライフワークとして取り組んでいる。四半世紀の間に私も変わったが、アマゾンの森とそれを取り巻く状況も激変した。

有名なトランスアマゾン・ハイウェイが開通したのは1975年である。当時すでに、毎年約20万haの熱帯雨林が失われていて、その破壊は世界的に最重要な環境問題の1つとなっていた。警笛が欧米社会を中心に鳴り響く。いわく、栄養塩類循環の平衡状態が崩壊して砂漠化する、熱帯の生物は遺伝的多様性の貯蔵庫であり貴重な遺伝子資源が枯渇する、伐採後の焼却で二酸化炭素が大気中に放出され地球の温暖化が促進される、地球上の炭素を循環させる動的システムが破壊される、牛の放牧やそれに伴うシロアリの大発生でメタンガスが放出され温室効果が促進される、流域で洪水が急増する、水の循環を担う樹木の減少で降水量が減る、等々である。

もしこれらが連鎖反応的に起これば、地球規模の異常気象によって農業生産等に深刻な影響が及ぶのはたしかだろう。人類はまさに存亡の危機に直面することになる。

私が調査して回った地域では、1960年代までは天然ゴムの採取が、70年代前半まではジャガーやオセロットの毛皮やワニ皮捕りが、森と人々との経済的関わりを中心だった。70年代後半にはマリファナ栽培の入植者が大量に移入。80年代に入るとコカ栽培が主となり、<sup>ラボ</sup>精製所の建設を含め森林伐採の規模が大きくなる。当然多額の金が動くから、森林の牧場化、大農場化も進む。90年代になるとさらに建築用材の伐採が加わる。その間政府も熱帯雨林への移住政策を推進するが、農業政策の失敗による入植者の貧困化や熱帯病の蔓延等につれ、彼らの麻薬栽培者化や反政府ゲリラ軍への加入が加速される。

一方私の変化といえば、熱帯雨林が毒蛇や毒グモやかゆい虫や病気の巣くう魔境から、萎えた五感を研ぎ澄ませ感性と理性を鍛え上げてくれる素敵な学校へと変わったことだ。原始の森は求めれば何でも教えてくれるかけがえのない教師なのである。

熱帯雨林には巨大な潜在力があり、今後の開発は人類の幸福に大きく貢献するだろうという楽観論がある。先に書いたように、森林破壊ですでに人類は存亡の危機的状況にまで追い込まれているという悲観論もある。そのいずれが正しいかの科学的論議は、私の手には負えない。私がアマゾンを守ろうとする動機は、そこが地球上に数ある生態系の中で最も生物的多様性に富んだ自然であり、そのことがもつ類まれな教育力ゆえである。

できるだけ多くの人が、熱帯雨林のもつ感動に満ちた教育的恩恵に浴することができればと思う。なканずく次代を担う子供たちには、是非ともこの教育力を享受してもらいたい。私は今アマゾンの一角に熱帯雨林学習センターを開設し、維持管理しながら、そこを世界中の子供たちに開放する秘策を練っている。